

中国上海市における親の居住地と教育戦略 —学校外教育の視点に着目して—

余常清
日本大学大学院

概要：本研究は、中国の代表的なグローバル・シティである上海市の例を取り上げ、親の属する社会階層と居住地が、彼の子どもの学校外教育にどのような影響を与え、彼らはどのような教育戦略をとっているのかを分析する。上海市は、都市化の進展に伴い社会階層分極化という問題が顕著になっている。その中、各社会階層の親は、各自の居住地を選択し、都心と近郊との居住分化の問題も浮上している。本稿は、調査対象者の居住地を「都心部・近郊部」の2種類に区分し、社会階層を「富裕層・貧困層」の2種類に区分することによって、それぞれの社会集団に属する親の学校外教育への教育戦略を検討する。その結果、親の学校外教育への選択は居住地によって規定されることが明らかになった。また、同じ居住地の親は社会階層により、学校外教育への教育戦略が異なることも見られる。特に、都心部に住む富裕層や近郊部に住む貧困層の親は、学校外教育の選択に、大きな差が生まれるという点が明らかにされた。

キーワード：教育戦略 上海市 グローバル・シティ 学校外教育 居住地

Parental Residency and Educational Strategies in Shanghai, China — Focusing on Shadow Education Perspectives —

Yu Changqing
Graduate Student
Nihon University

Abstract: *In this paper, I have taken the example of Shanghai, a representative global city in China, to elucidate how parents' social class and place of residence affect their children's shadow education and what exactly their educational strategies are. With the progress of urbanization in the metropolis, the problem of social stratification polarization in Shanghai had become more pronounced. parents belonging to each social stratum are increasingly choosing their own places of residence, and the issue of residential differentiation between the city center and the suburbs has emerged. The results show that parents' choices for shadow education are defined by their place of residence. It is also observed that parents in the same place of residence have different educational strategies toward out-of-school education depending on their social class. In particular, the study reveals that parents of wealthy families living in urban centers and parents of poor families living in suburban areas make bipolar differences in their choice of shadow education.*

Keywords: *educational strategy, Shanghai, global city, shadow education, residence*

1. はじめに

近年、社会の不平等問題は、多くの困難を伴いながら多様な観点から研究が進められてきている。その中の重要な課題は、「不平等と教育」である。この問題について教育社会学界では、1970年代にフランスの社会学者のブルデュー（1979）が社会階層による教育の再生産という視点から提出した、「文化的再生産論」が広く注目を浴びている。すなわち、上層階級の子どもは入学前に学校文化に適合的な文化的素養を家庭内で身につけられるが、中間階級や庶民階級の子どもはその機会が乏しく、子どもの出身差異が教育達成に違いをもたらしているということである。

近年、この文化的再生産論を中国に応用する実証的研究が蓄積されてきている。張（2021）によると、中国では1970年代末に改革開放政策が打ち出されたことに伴い、経済発展の要として重要視された教育は、経済的、社会的地位と社会移動に対するその影響を徐々に強めたことが指摘されている。張・張・涂（2016）は、中国総合社会調査（CGSS2013）のデータを用いて、プロビット回帰分析法に基づいて高等教育による社会階層の再配分の効用に関する研究を行ってきた。分析の結果は、高等教育が階層構造の流動性に弱い影響を与えているが、高い社会階層に属する親は、蓄積された政治的資源および経済的資源を子どもの高等教育の質に転化させ、世代間連鎖が起こっていることを示している。しかし、この研究では、高等教育段階以前の教育段階で異なる社会階層の親が、どのような教育戦略および子育て仕方を選択した結果、教育の不平等がもたらされるのかについての検討が不十分と言える。子どもの一生の発達の基礎となり、平等化の実現にとっては重要な意味を持っている初等教育段階を検討する必要があるだろう。

一方で、劉・郭（2020）は、「都市—農村」の比較の視点を置いて、中国総合社会調査（CGSS2015）の調査データを用い、都市部と農村部による地域格差・不平等が大学進学率および進路分化をもたらすことを明らかにした。だが、今の中国では、単純な都市部と農村部との格差でなく、都市化や都市再開発による出稼ぎ労働者の増加や戸籍制度の影響で、都市内部の格差に関する諸問題が顕在化している。とりわけ近年では、中国の大都市における出稼ぎをはじめとする低い社会階層の人々が、都市の郊外に集まることによって、居住地による格差が生じている。例えば、Li&Wu（2006）は、上海市の三つの区の調査に基づいて、今の上海市の住宅差別化が、社会経済的状况に応じて再編成され、差別化され、都市内の居住地の不平等という現象が激しくなることを明らかにした。すなわち、社会階層分極化が都市内の住み分け（居住分化）を招くということである。

以上のように、社会階層と教育再生産に関する研究は、この両要素の相関関係を指摘するに留まる。つまり、高い社会階層に属する親は、所有する経済資本と文化資本を活用し、子世代の教育達成に有利な立場にあることが明らかにされてきた。しかし、こうした教育再生産の結果ではなく、教育不平等の再生産プロセスを解明する必要があるだろう。それは、異なる社会階層に位置する親が、どのような教育戦略を選択するのかによって、子どもの教育達成の差が生じ、その結果として再生産が起こるという過程を究明することである。

したがって、本論は、従来の中国社会における「都市/農村」という単純な地域間による教育格差の分析枠組みではなく、「都市部/近郊部」と親の社会階層との二つの視点からその不平等再生産のメカニズムを解明することを目的としている。そのために、グローバル・シティ上海市を事例に、各集団に所属する小学生を持つ親は、子どもの学校教育にどのような教育戦略を持っているのか、その不平等再生産のメカニズムを解明し

たい。

2. 先行研究の検討と分析の枠組み

出身階層・階級による教育機会の制約は、多くの国や時代で見られる普遍的な現象である。そのうち、社会階層による学校教育の制約を主眼とする研究が数多く蓄積されている。例えば、Cardona, Bら（2012）は、学校と家庭との関係構築の視点から、アメリカにおける多様な文化的背景を持つ家族を対象としたインタビュー調査と参与観察で、親の社会階級、学歴および言語が、子どもに対する教育関与と教育戦略に強く影響していることを指摘した。Lareau（1989）は、家族と学校との関係における社会階級の違いという視点から、白人労働者階級と中流階級の学校関与の違いを研究した結果、中流階級の親のほうが教師との対話や学校活動に積極的に関わることを明らかにした。

日本の教育社会学界においても、親の社会階層と子どもの学校教育に関する研究が蓄積されてきている。たとえば、古田（2012）は、出身階層が高い（低い）場合、家庭と学校文化との親和性が高く（低く）、学校に適応する可能性も高く（低く）なると指摘する。さらに、親の出身階層が、子どもの発達や成績とった教育達成に影響するののかについても研究がなされてきた。前馬（2011）は、小学生1年生に対する「物語作り」調査を行い、子どもの言語運用と家庭環境の関連について分析した。その結果は、状況独立的な言語運用を生み出す「精密コード」の獲得が、親の職業、家族構成によって左右されるということであった。それに相反して、「限定コード」を用いていた「ブルーカラー職業」、「母子家庭」、「出生順位が遅いこと」といった特徴を有する家族は、経済的不安定にも陥りやすく、後の教育達成にも大きく影響しかねない傾向があることが明らかにされた。また、小針（2002）は、連合総合生活開発研究所による「小学生・中学生の生活に関するアンケート調査（1995）」のデータを用いて、クロス集計分析を行った結果、親の出身階層が高いほど、子どもの学業成績が高くなることを明らかにした。これらの先行研究で、注目すべきは、出身階層が学習時間に影響を与え（階層→学習時間）、その学習時間の階層差が学力の生成に結びつく（学習時間→成績）という分析ルートがあることである（金子 2004）。

本論では、このような学校教育と出身階層の分析ではなく、学校外教育に注目したい。子どもの学業成績の差異をもたらすものとしての学校外教育への投資が、出身階層と蓄積された諸資本によって異なるのかという視点から分析をする。

では、親の社会階層と学校外教育に関する先行研究を検討しよう。欧米では、Shadow education と呼ばれ、いくつかの研究が蓄積されている。Lareau（2003、2011）は、中産階級の親たちは、学校外教育活動を利用することを通して、子どもの認知能力や非認知能力を発達させる一方で、子どもに対する介入が少ない労働者階級の親たちは、経済的・制度的な資源に制限があるため、ほとんどの学校外教育に参加できないことを明らかにした。日本では松岡（2016）が、厚生労働省による21世紀出生児縦断調査の個票データを分析した上で、高学歴・高収入な親が子どもの成長に際して経済資本を学校外教育機会に転換する傾向にあることを指摘する。都村（2007）は、SSM調査（「社会階層と社会移動全国調査」）の1985年と2005年のデータを用いて分析を行い、学校外教育費用の支出レベルを支出ゼロ/支出少ない/支出多いという3段階に分け分析した結果、世帯の所得レベルと学校外教育の関連が強まる傾向にあることを明らかにした。特に、母親の学歴による学校外教育の差が大きくなっていることが指摘されている。

では、中国の社会階層と学校外教育の関連はどうだろうか。先行研究によれば、家庭

の経済状況、親の社会階層、最終学歴などの諸要素は、生徒の学校外教育に大きく影響することが指摘されている。例えば、馬（2017）は、浙江省慈溪市に住む47世帯の親を対象とし、親の学校外教育に対する選択志向および、彼らの教育戦略を社会階層ごとに明らかにした。そこでは、下位階層の親は、学習塾に対する意欲が強い一方、習い事に対して無関心であること、上位階層の親は、習い事に大きな力を注いでいるが示されている。徐（2012）は、上海市の小学生を持つ親を対象とし、家庭の総収入と学歴が子どもの学校外教育に影響を与え、上位階層の親は子どもの総合的な視野と素養が育まれる興味クラス（日本語：習い事）に注目する一方、中間層や下位階層の親は学習塾を中心とすることを明らかにした。

これら多くの先行研究は、子どもの学校外教育の選択動機に主に親の社会階層または親の経済資本と文化資本の蓄積において、どのような差異が生じるのかを検討している。そのため、大都市内における教育再生産の構造が検討されていないという課題がある。そこで、本論では、都市社会学を手がかりにし、都心部と近郊部の空間論の視点から、この構造について検討したい。

そこで注目するのは、社会学者であるサスキア・サッセン（1991=2008）の「グローバル・シティ」（Global City）に関する研究である。サッセン（1991=2008）が描いているように、グローバル経済の発展は、巨大都市内部に比較的小集団の超富裕層と膨大な貧困層を抱える「グローバル・シティ」を作り出した。超富裕層は、都心部のセキュリティの高いゲーティッドコミュニティに住み、他の諸階層とは異なる生活の質を享受するようになっている。富裕層=郊外、貧困層=都心部という単純な住み分けではなく、都心部に居住する超富裕層を頂点にした、地理的な「混住」と実質的な生活様式の多様化とが進んでいるのである。本論で検討する上海市は、まさにサッセンのいう「グローバル・シティ」である。

そこで、本論文では、中国の代表的な大都市である上海市を都市部と近郊部との二つの空間に分け、各居住地の異なる社会階層に属する小学生の子をもつ親が、学校外教育にどのような教育戦略を持っているのかを明らかにすることを目的とする。以下、第3節で調査概要を述べ、第4節で都心部富裕層、都心部貧困層、近郊部富裕層や近郊部貧困層、それぞれの親を対象にしたインタビュー調査データから、彼らの子どもに対する学校外教育への考え方について考察を行う。第5節では、結論として現代の中国の大都市内部の住宅構造と社会階層との関係から、社会不平等の再生産の論理を再解釈する。

3. 調査概要

調査対象者は、調査時点で小学校4年生、5年生を持つ親たち30名である。彼らに許可を得て、オンラインインタビュー調査を行った。その基本情報示したのが表1である。調査対象者の特徴は、以下の3点である。第一に、調査対象者は、母親に限定せず、父親も含めた。第二に、すべての親たちは上海市の戸籍を持つが、他の省市から移居し、後に上海市の戸籍を取得した親も含めている。第三に、調査した際に、すべての親は一人っ子を養育している。

インタビュー調査の第一段階では、機縁法を用いて、親戚や友達などの知人を通して対象者を募集した。第二段階では、前段階の調査協力者に、条件を満たす同僚や友人の紹介を依頼して調査対象を拡大した。本稿で引用する内容は、筆者が日本語に翻訳したものである。その際に、文化的背景により異なる言葉、言い回しや語感をなるべく伝えるために、詳細な推敲を行った。

この点を踏まえ、本稿の社会階層の定義は、主に対象者の経済資本（家族の平均年収）を主眼として分析した。具体的には、余（2022）の分類に基づいて、「富裕層」は年収25万円（約450万円）以上の層を指す。「貧困層」は、年収10万円（約180万円）未満の層を指す。文化資本の分類は、学歴を指標として考察し、大卒以上を高文化資本層、それ以下を低文化資本層とした。さらに、居住地の分類も余（2022）の研究に基づいて、都心部と近郊部の二つの区域に分けた。

表1 調査対象のプロフィール (n=30)

No.	居住地	社会階層	性別	学歴	職業	世帯平均年収 (円)
1	都心	富裕層	女性	大卒	個人経営者	1000万
2	都心	富裕層	男性	大卒	公務員	650万
3	都心	富裕層	女性	院卒	校長先生	650万
4	都心	富裕層	女性	小卒	個人経営者	1000万
5	都心	富裕層	女性	大卒	会社員	1000万
6	都心	富裕層	男性	院卒	教師	650万
7	都心	富裕層	女性	専門卒	個人経営者	1000万
8	都心	貧困層	女性	高卒	運転手	160万
9	都心	貧困層	男性	高卒	臨時職	200万
10	都心	貧困層	女性	小卒	臨時職	120万
11	都心	貧困層	男性	小卒	臨時職	160万
12	都心	貧困層	女性	小卒	会社員	150万
13	都心	貧困層	女性	無学歴	臨時職	100万
14	都心	貧困層	女性	小卒	臨時職	100万
15	都心	貧困層	男性	大卒	会社員	160万
16	都心	貧困層	女性	無学歴	無職	160万
17	近郊	富裕層	女性	大卒	銀行職員	800万
18	近郊	富裕層	女性	大卒	会社員	650万
19	近郊	富裕層	男性	高卒	個人経営者	650万
20	近郊	富裕層	女性	大卒	大学教員	1000万
21	近郊	富裕層	男性	大卒	会社員	1000万
22	近郊	富裕層	女性	小卒	不動産	800万
23	近郊	富裕層	女性	院卒	大学教員	1000万
24	近郊	貧困層	女性	無学歴	工場従業員	200万
25	近郊	貧困層	女性	高卒	臨時職	100万
26	近郊	貧困層	男性	大卒	会社員	170万
27	近郊	貧困層	女性	無学歴	臨時職	100万
28	近郊	貧困層	女性	無学歴	臨時職	100万
29	近郊	貧困層	女性	大卒	会社員	170万
30	近郊	貧困層	女性	小卒	無職	100万

4. 調査分析

(1) 都心部に住む富裕層：多面的な能力を開発＝グローバルパーソン

最初に、都心部に住む富裕層の親の学校外教育への考え方について検討する。都心部に住む富裕層の親は、豊かな経済資本に支えられるため、学校外教育は子どもの勉強面の関心より多角的な視野や体験という「体験型」の学校外教育を選択する傾向がある。なぜなら、多面的な能力を開発しながら、グローバルパーソンの育成を目指しているからである。さらに、同じ社会階層に属する親を高文化資本の親(No. 1、No. 2、No. 3、No. 5、No. 6)と低文化資本の親(No. 4、No. 7)に分類して分析する。

はじめに、高文化資本の親の語りに注目したい。上海市の都心部に住む高文化資本の親は、子どもの勉強面を重視する一方、子どもの趣味にも注意を払う。なぜなら、子どもの趣味は、勉強に対する促進要因として作用すると考えているからである。例えば、大卒で個人経営者であるNo. 1の母親は、「子どもの趣味が大切だ。今は小学校の段階で、子どもの自制力が高学年の子より弱い。だから、今は子の趣味をできるだけ満たすだけでなく、勉強することにも注目している。年齢とともに、趣味が重要なポイントになると思う」という発言があった。大学院卒で上海市の教育委員会の管理職に勤めている教師のNo. 6の父親は、「今の段階で、息子がいくつかの趣味クラスに入っている。例えば、サッカー、音楽など。もちろんこの趣味クラスは、彼が選んでおり、親としては支持している。勉強と良いバランスを取る(中国語：劳逸結合!)」、「趣味クラスは、彼の勉強に対するいい影響がある」と言う。

また、こうした親は、子どもの趣味を長い目で見るという立場に立ち、それによって子どもの勉強を促進できるという共通認識を持っている。「趣味は勉強の基礎で、趣味が培われれば、勉強に役立つはずだ」(No. 3)、「趣味の重要性が無視できない」(No. 1)、「趣味クラスはうちの子の今後に役にたつ」(No. 2)などの発言からも分かるように、こうした親は、子どもの趣味に対する肯定的な認識があり、認知能力面の開発よりも非認知能力面の開発を重視していることが推測できよう。

つぎに、低文化資本を持つ親の学校外教育を検討する。低文化資本の親も、子どもの趣味に大きな関心を持ち、今後の人生の中で勉強だけではなく、それ以外の多様な能力の育成も大事だという共通認識が見られる。高卒で個人経営者であるNo. 4の母親は、「経済能力に余裕があるから、子どもの選択の機会を与え、好きな興味クラス、好きじゃない興味クラス、どっちにも参加してみて、彼の興味に応じて選べばいい。親としては、子どもの要望をできるだけ満たしたい」と語る。同じく会社を経営しているNo. 7の母親は、「私たち夫婦の2人の学歴が高くないので、基本的に子どもの趣味を尊重してから興味クラスを選んだ。」と語る。このような親は、文化資本が低い、会社を営んでいるため、収入が一般職に勤める親より安定しかつ高いという利点があり、強い経済力に支えられている。したがって、子どもの要望に応じた学校外教育に投資することが可能なのである。

なぜ、都心部に住む富裕層の親は、子どもの多面的な能力を育成することを重視するのか。個人経営者であるNo. 1の母親は、「私が小学校の頃、両親は自分の勉強にかなり関心を持っていた。今までの経験から、親がずっと子どもの勉強に目を留めるのはよくないと考えた。今の社会では、勉強以外の多様な能力を育てるのも重要だ」と話す。父親は上海市の教育委員会に勤めており、母親は副校長のNo. 3は、「時々、私の母親は「こ

¹ 勉強には労働と休息のバランスが必要である。

の興味クラスは無駄遣いではないか、孫の勉強に影響するのか」という否定的な態度を持っている。しかし、私はそのように思わない。勉強ばかりしているのは厭学（勉強が嫌い）な気持ちが生じやすいと思う。どうせ自分のお金を使うのだ。私の両親には関係がない」と語る。こうした親は、自分の幼い頃の経験から、50代か60代の両親（祖父母）の教育理念とは異なり、子どもの気持ちについてよく考え、今の社会の発展に応じた、子どもの学校外教育に対する新たな考え方を持っている。

また、もう一つ留意すべき点は、勉強以外の趣味や文化嗜好を育成することが、子どもの将来の交友関係にいい影響があると認識されているという点である。例えば、個人経営者のNo.4の親は、「ある芸術やスポーツなどの趣味があれば、同じ趣味または、いい人を引き寄せる。」と話す。つまり、会社経営している親の場合、同じ社会階層および文化嗜好によって、子どもの交友関係の質量（社会関係資本）が変化することを重要視することがわかった。

こうした都心部に住む富裕層に属する親集団は、子どもの幼少期が「性格」、「趣味」、「慣習」という資質を培う重要な時期と考えているため、習い事を通じて子どもの能力の発展にいい影響を与えようとする。それは、「子どもは絵が好きだから、絵の興味クラスを通して、芸術鑑賞の能力を養成させたい。それは、子どもの未来に役立つかも」(No.2)、「サッカーの興味クラスは、子どもの集団性の養成に対していいと思う」(No.6)という発言から読み取られる。

また、こうした集団の親は、勉強面については外教（日本語：外国人の教員先生）と直接オンライン英会話をしながら、子どもの英語力を身につけさせるというルートがある（No.1、No.4）。都市部の富裕層は、早い段階から準備して、国内の厳しい受験戦争を避けつつ海外留学させるという選択肢を通して、グローバルパーソンの育成を目指しているのである。彼らは、豊かな経済資本に支えられるので、国内の受験戦争の厳しさを避け、小学校段階から留学の準備を始め、英語能力や英会話に注目し、西洋文化の影響で子どもに多様な非認知能力の養成を目指すのである。

(2) 都心部に住む貧困層：万全な受験態様＝国内での勝者の育成

本節は都心部に住む貧困層に属する親集団の学校外教育への考えや教育戦略について検討していく。こうした集団の親は、都心部に住むため、周りの富裕層の親や都心のライフスタイルの影響を受け、子どもの教育を重視することとなる。学校外教育面は、経済資本が欠乏しているため、「钱要花在刀刃上」（日本語：お金を必要な時に使う）という戦略で、国内での勝者を育成することを目指して、世帯の貧困の状態を脱出するという希望を子どもの教育に転化する。そのため、入試対策に万全な準備をするため、興味クラス（習い事）より学習塾の方を重視する傾向がある。その中、No.15は高文化資本を持ち、No.8、No.9、No.10、No.11、No.12、No.13、No.14、とNo.16は低文化資本を持つ親集団である。

高文化資本を持つ親は、自身の勤務先の経験から、「学歴偏重社会」の中国では、「いい学歴＝昇進しやすい」という認識があり、補習という手段を通して、万全な受験準備をする傾向がある。大学を卒業した後、一般の企業に勤める高文化資本を持つ親のNo.15の父親は、「今の中国では、学歴が本当に重要だと思う。私の経験から、うちの会社ではいい学歴（大学）を持つ人たちが昇進しやすい」と語る。学校外教育に対する態度について彼は、「有限なお金を使って、弱い科目を学習塾で勉強させ、もっといい成績を目指す。息子は数学が本当に悪いので、今、数学の学習塾に通わせている」と言う。

No. 15 は、なぜ、裕福ではないのに、子どもの学校外教育に大きな関心を持ち、上海市の都心部に住むのか。No. 15 は「都心なので、教育熱心な親が多い。教育の雰囲気が良い。教育資源も良い。今の住むところは、妻の両親から得た「老公房」であり、狭いが仕方がない」と話す。元々、この父親は上海市の出身ではなく、大学進学のために、上海市に移動し、上海市出身の母親と結婚して、そのまま上海市に住んでいる。中国の最も受験が厳しい地域の出身なので、「小镇做题家」²と自嘲しながら、子どもに対する大きな教育期待を持っている。特に、人材が多い中国の大都市部では、立身出世には学歴が重要であるという認識が強く残っているので、子どもの受験に多大な関心を持っている。

続いて、低文化資本を持つ親の学校外教育への考えや教育選択について検討する。都心部に住む貧困層の親の中には、「成績＝良い大学＝良い仕事ができる＝いい収入＝成功（勝者）」という認識上の図式が定着しており、彼らの語りから、「学習塾」に対して高い熱意が読み取れる。父親が運転手で、無職のNo. 8の母親は「教育と学歴が人生の生存手段で、子どもはまだ小学校の段階だけど、早めに準備して、将来いい大学に進学してほしい」と語る。学歴が低いので臨時職で勤めているNo. 10の母親は、「都心部に住むから、周りの人々が学習塾に対して極めて熱意を持っており、その環境の影響でスタートラインから負けないって気持ちがある。お金がないものの、子どもの勉強の補習の支払いは、惜しくない」と言う。このように、彼らには、学習塾を通して、良い成績が獲得でき、それによって、「進学志向」と「勉強志向」が高められるという認識があると考えられる。

では、なぜ都心部に住む貧困層の親は、経済資本の制限にもかかわらず、学習塾に対する熱意が高いのか。表2が示すように、主に三つの理由が考えられる。

表2 都心部に住む貧困層の親の学校外教育への選択動機 (n=9)

周りの社会環境の影響	No. 8 No. 10 No. 11 No. 12 No. 13
「学習は人生を変える」の観念	No. 8 No. 9 No. 10 No. 11 No. 12 No. 13 No. 14 No. 15
わからないので、塾の先生に頼む	No. 11 No. 12 No. 13 No. 14 No. 16

まず、「周りの社会環境の影響」が、No. 8、No. 10、No. 11、No. 12、No. 13の親たちの学校外教育の選択動機である。大都市の発展とともに、都心の開発は郊外の開発より一足先を行くという現実があり、都心部には教育熱という雰囲気やライフスタイルが、こうした貧困層の親に影響を与えている。「都心の雰囲気の影響、お金持ちになりたい、勉強しかない。砸锅卖铁(日本語:ありったけの物を投げ出す)で子どもが読書できる」(No. 11)、「学校のほとんどの子どもが塾に通っている。負けないため、学習に力を注ぎたい」(No. 13)と話す。次に、一部の親たちは「学習は人生を変える」(中国語:学習改變命運)という強い観念を持っている。「中国では、教育と学歴が人生の生存手段だ」(No. 8)、「うちの家庭状況には、勉強という一つのルートしかない。」(No. 14)と語る。他方で、今の中国の小学校の授業内容は以前より難しくなり、特に低文化資本を持つ親は受験に関わる知識がないので、塾の先生に頼んで、苦手な科目を補習することを動機として語る親もいる。例えば、「私たちにとっては、勉強が全然ダメだ、子どもの英語の成績を上

² 地方の小都市出身者が大都市の大学に入学し、大都市で就職した場合、感じるギャップはさらに大きいと言われる。

げるため、学習塾に行かせる」(No. 12)、「今の宿題がうちの時よりけっこう難しくなり、できない。専門家に頼んだ方がいい」(No. 16)と語られている。

以上のように、都心部に住む貧困層に属する親は、子どもの勉強に対して熱意を注ぎ、万全な受験準備のために習い事より学習塾を利用する傾向がある。それによって、貧困層の親は、学校教育を成功の手段とみなす。彼らは、子どもの成績向上のために学校外教育を活用し、国内における勝者の育成を目指すのである。

(3) 近郊部に住む富裕層：応試教育への挑戦＝限られた試験機会への強い期待

近郊部に住む富裕層に属する親たちは、安定的な仕事があり、衣食住を満たした上で、子どもの教育投資に対する余裕もある。また、こうした集団に属する親は、近郊部に住むものの、子どもが高学年になると、都心の便利な教育資源や豊富な教育選択を目的に引っ越しをする予定があることがわかった。学校外教育への考え方は、学習塾と習い事との両方を並行して応試教育の対策をしながら、子どもの未来に役立つ能力が伸びる習い事にも注目している。近郊部に住む富裕層の親集団の中、高い文化資本を持つ親(No. 17、No. 18、No. 20、No. 21、No. 23)と低い文化資本(No. 19、No. 22)を持つ親との二つの集団を分けて分析していこう。

まず、近郊部に住む高文化資本を持つ親の学校外教育への考えや教育戦略について分析していく。近郊部に住む一部の富裕層の親は、子どもの勉強を重視するものの、子どもの面倒を見る時間があまりないので、塾の先生に頼るという傾向がある。父親は都心の大手企業で勤めており、上海市の政府機関で勤めているNo. 21の母親は、「近郊に住んでいるため、毎日の通勤時間が長くて、残業もあり、子どもの勉強の質を落とさないようにするために、学習塾に通わせる」と話す。銀行管理職でNo. 17の父親は、「仕事は忙しいから、学習塾の先生に頼むことで安心できる。妻は教師だが、万能ではないよ」と語る。

また、こうした集団の親は、子どもの勉強を優先して、応試教育に挑戦するという共通認識を持っている。彼らは、子どもがよい大学に入れるかどうかや、いい成績を取れるのかで文化資本が高い自分の育児方法を検証する。No. 20やNo. 23の親は、「大学の教員であるから、子どもの学習に対する高い教育期待を持っている」(No. 23)、「大学教員なので、教育上の有利があり、いい大学の人脈や視野が全然違う。查漏补缺(日本語：わからない知識を補う)のために学習塾も通わせている」(No. 20)と話す。また、会社員のNo. 18の親は、「オンライン教育も利用して、遠距離の英語の有名な先生の授業に参加させている」という発言もあった。

付け加えて、これらの親は、将来的に教育資源が豊富な都心部に引っ越す計画を持っている場合がある。No. 18の親は、「仕事が忙しいから、子どもの学習はほとんど学習塾の先生に頼らざるを得ないが、高学年の時には、通勤時間を縮めて子どもに付き添いながら勉強を見守るために、都心部の重点校がある学区内に引っ越す予定がある」と言う。また「子どもの教育に力を入れ、もっと貯金しながら、中学校の時、都心に引っ越したいと思う」(No. 17)という発言もあった。

他方で、近郊部に住む低文化資本を持つ親の学校外教育への教育戦略はどうだろうか。彼らは、仕事が忙しいとは言うものの、子どもを学習塾に通わせるという方式を通じて、子どもの勉強面を重要視する。個人経営者であるNo. 19の父親は「会社を営むことが本当に忙しい。小学校の知識も難しいし。私は本当にできないので、晩託班(日本語：先生の家でご飯を食べ、宿題の指導をする塾の一つ形式)に参加させる」、「学習塾に通

って、成績を上げるだけではなく、子どもを拘束する面もある」(No. 22)と話す。

ここで注意すべきは、こうした集団に属する親は、子どもの勉強以外の発達にも関心があり、勉強と興味ともに成長させるために、子どもの習い事へ熱意を向けるということである。しかし、都心部に住む富裕層の親が、子どもの多面的な能力を育てることを優先するのは異なり、近郊部に住む富裕層の親らは、子どもの勉強以外に余裕があれば、子どもの能力を伸ばす習い事を選ぶ傾向がある。例えば、「一般的には、踊りができる人の性格が明るいと思う。ダンスも身体のバランスに役立つ点がある」(No. 18)、「男の子は字がすごく重要だろう。中国の諺で「字如其人」(日本語：字を見た後、この人に対する印象を残る)があるよね。最近、彼に書道の興味クラスをさせて、字をきれいに書くことで、他人にいい印象を与えたい」(No. 23)と語る。「今の段階は、学力の向上が一番重要なことで、勉強以外の興味を育てることも考慮する」(No. 19)という発言もある。上海市に所有する不動産から高額な賃料をもらう富裕層のNo. 22は、「今、子どもに絵の興味クラスに通わせることによって、芸術面での能力を育てるだけではなく、「芸術特长生」³として、入試の利点もある。良い大学に入りやすいと考える」と語る。つまり、習い事が入試に有利な機能を持っていることも、親の選択動機の一つとしてあることが推測できる。

また、近郊部に住む富裕層に属する親は、日常的に忙しいけれども、子どもの成長のため、できるだけ子どもに付き添うという意識が強いという点に留意するべきである。例えば、「時間があれば、娘のダンスクラスに付き添って見ることができる」(No. 18)と話す。このように、近郊部に住む富裕層の親は、文化資本によって習い事の認識の部分で異なる点があると推測できる。高文化資本の親は、子どもの能力を育てるという側面から考える傾向があり、低文化資本の親は、盲従や入試の利点という側面から考えやすいということである。さらに、親の文化資本は子どもの文化的活動(習い事)への関与と強く相関している。

以上のように、近郊部に住む富裕層に属する親集団の学校外教育への考えは、主に、子どもに良い成績を取らせるために学習塾に通わせた後に、多面的な能力を育てる習い事を選ぶ傾向がある。また、彼らは、自分の育児仕方の検証のために、中国の厳しく、限られた試験機会に強い期待を持ちながら、習い事は子どもの入試上の利益として活用する傾向がある。

(4) 近郊部に住む貧困層：無理のない自然な成長＝親の無力感

近郊部に住む貧困層の親は、自身の諸資源上の制限を踏まえ、物価が高い上海市での生計を立てることに一生懸命であるために、子どもの教育に意図的に介入する余裕がない。そのため、子どもの自然性を尊重しながら、無理のない自然な成長を志向するが、その背後には親の大きな無力感がある。また、親は常に理想と現実との間のギャップを越えることの困難さを強く感じている。つまり、いい生活を送るという強い期望のために、子どもに対する高い教育期待や教育達成を望むが現実的には諸資源の制限があり、教育上では学校外教育より学校教育の方に大きく依存する傾向が見出される。他の集団に属する親と同じく、高文化資本を持つ親(No. 26、No. 29)と低文化資本を持つ親(No. 24、No. 25、No. 27、No. 28、No. 30)との二つのパターンに分けて分析していく。

高文化資本を持つ親は、学校外教育に対して、経済上の制限の範囲内で子どもの不得

³ 芸術特长生としては特別ルートの入学制度があるからである。

意な科目を補習させるために、普通の学習塾より安くて、馴染みの先生が開設した学習塾を選ぶ傾向がある。中小企業の一般職に勤めている大卒のNo. 26の父親は、「普段は行かない。夏休みの時に集中の補習がある。娘は数学が苦手だから、担当先生からおすすめされた学習塾に通う」と話す。同じく大学を卒業し、上海市の戸籍を取得した普通の会社員の父親と主婦の母親の家族構成であるNo. 29は、「いい成績を取るために、子どもに学習塾に通わせる。今は小学校だが、勉強の土台を築く重要な時だ。担任の先生のところでは補習させている」と語る。「学級の中、何名の子どものも参加でき、先生の薦めだから便利かつ安い」(No. 26)、「娘の担任先生だから、皆さんがよく知っており、安心できる。外の学習塾よりも安い」(No. 29)と親たちは述べている。

このように、近郊部に住む貧困層の文化資本が高い親は、子どもの学習に対して無関心ではなく、むしろ、学習塾を通していい成績を取るという教育期待がある。この部分については、多くの中国の親が持つ「望子成龍；望女成鳳」(日本語：我が子が学問や仕事で成功または出世することを願う親の気持ちを言う)という価値観と合致している。ここで注意すべき点は、こうした親は、子どもの教育期待にトップレベルの大学を目指すことがなく、自然な成長をしながら、一般的な教育達成で満足するということである。例えば、「いい成績、いい大学がもちろんいいけど、普通の学校に進学することも満足だよ、将来娘が平凡な生活を送る仕事ができるのでも満足するよ」(No. 26)と話す。彼らは、そのために、経済資本の蓄積をいとわない。例えば、No. 26の父親は、「最近、簿記試験があり、娘と一緒に勉強している。もしこの資格を取れば、給料が一ヶ月1000元くらい上がる」と話した。今は無職であるNo. 27の母親は、「夫の負担を軽減するために、学歴不要な仕事を探し、まだ若いので、清掃かレジの仕事を紹介してくれ、子どもの教育のため貯金したい」と語った。

次に、文化資本が低い親の学校外教育への考えや教育選択について分析していく。こうした親らは、経済面と学歴面との両方の欠乏から、深い無力感を持っている。子どもの成績面や勉強意欲を重要な判断基準として、学校外教育をほとんど利用しない。こうした親らは、もともと子どもに対する教育期待を持つが、家族の経済状況と子どもの勉強意欲の両面から、最終的に学校外教育の利用を諦める傾向がある。例えば、臨時職をやりながら、貧乏な生活を送るNo. 25の母親は、「衣食住が本当に重要だ。物価が高い上海に住むから、日常生活を支えるために、たくさんの費用が必要になる。子どもの教育は、学校で十分だろう」と話す。また、「塾に通わない理由は、正直に言えば、お金がない。もし、条件が許すなら、子どもに補習をやらせたい。しかし、娘は勉強に対して興味がないから補習しなくてもいい」(No. 30)と語る親もいた。ここで注意すべき点は、こうした集団に属する親は、家庭の乏しい経済資本の状況に加えて、子どもの勉強意欲が学校外教育(学習塾)に通うかどうかの判断基準となっていることである。つまり、もし、子どもに学習意欲があれば、学校外教育を通して成績を上げること自体に意義があるという認識は強く持っているのである。

さらに、習い事の利用について、こうした集団の親は、消極的な態度、または無関心な考えが見られる。「大学に進学した後に、子どもの趣味を育てても遅くない」(No. 29)、「興味クラスはどのような効果があるのか、私はわからない。時間の無駄遣いだ」(No. 28)、「能力を育てることは、子どもの成人後でもできるよ。そんなに高額な興味クラスは、貧しい家庭のうちにとっては、本当に無理だ」(No. 24)と語る。つまり、こうした親は、習い事が、子どもの勉強や将来の進路に役立たないと考えている。それは、長期的な視点がないということより、むしろこうした習い事を通じて養成される能力面が将来の就

職に無関係であると認識されていると言える。

以上のように、近郊部に住む貧困層に属する親は、生活を維持するために、衣食住という生活面のことを優先的に考える。子どもの教育に対する高い教育期待を持つと言っても、子どもの勉強意欲や成績から判断することによって、値段が安い学習塾を選ぶ傾向があり、お金が必要な学校外教育あるいは習い事より学校教育を信頼する。つまり、親の諸条件の制限のため、無理のない自然な成長という点が強調される。その裏では、自分の条件の制限、子どもにいい教育機会を与えられないという無力感や自責の念を持っている。また、興味クラス（習い事）を通して多様な能力の育成について、こうした親は、「時間の無駄使い」「いつでもできる」という消極的な認識を持っているのであった。

5. 結論

以上のように、本稿は、中国の典型的なグローバル・シティである上海市において、異なる社会階層に属する親の居住地という要因が、子どもの学校外教育にどのような影響を与えて、彼らはどのような教育戦略を持っているのかについて検討してきた。本論で明らかになった知見を以下にまとめた。

はじめに、親の教育戦略は、彼らの居住地に規定されていたという点が明らかになった。つまり、都市の発展に伴い、大都市の社会階層分極化による居住分化の問題が、教育にも影響を与えているのである。親の学校外教育の選択は、社会階層だけではなく、居住地も大きな影響を与えるのである。具体的には、上海市の都心部では、多様な教育資源および学校外教育の選択があり、親は強い教育意欲を持っており、子どもの学校外教育にも関心を寄せている。たとえ貧困層でも、都心部の保護者らは、都心の雰囲気から影響を受けて、子どもの学校教育を補足する方法として、学校外教育への投資も重視していた。それに対して、近郊部の親は、都心部の豊かな学校外教育資源を利用する傾向があり、一部の貧困層に属する親は、自身の諸資源に制限があるため子どもの自由な成長を志向しながらも無力感を感じている。こうした近郊部の貧困層に属する親たちは、社会階層を越える制限を受けるため、都心と近郊との都市内の二元社会を打破することが難しい状況にあることを示している。

次に、都心や郊外にかかわらず、同じの居住地内の親は、社会階層によって学校外教育の選択および選択動機が違うことを明らかにした。具体的には、都心部に住む富裕層の親は、豊かな経済資本に支えられるため、子どもの多面的な能力の育成を目指し、子どもの勉強以外の非認知能力を育てたうえで、海外留学を目指す。都心部に住む貧困層の親は、都心部の居住環境や雰囲気から影響され、子どもの勉強への成功志向があり、学習塾は成績を上げる手段の一つとして認識され、中国国内の厳しい試験への準備を目指す傾向がある。この集団に属する親らは、子どもがよい成績を獲得することを望み、「学習塾の利用=よい成績の取得=よい大学の進学=よい仕事=階層の向上」という認識が強かった。一方、近郊部に住む富裕層の親は、仕事が忙しいものの子どもの教育に多大な関心を持っていることに伴い、経済資本の余裕があるので子どもの多様な能力を伸ばす習い事も選択していた。なお、この集団の親は、学校外教育の利用は大学進学の一つのルートと認識している点も注意すべきである。近郊部に住む貧困層の親は、子どもの成績や勉強意欲を判断基準にして学校外教育（主に学習塾）をさせる傾向があり、子どもの自由な成長を期待し、学校外教育より学校教育、学校の先生に頼り子どもに高い教育期待を持たないというより、子どもが自立でき手に職を付けることを重んじ

る。

最後に、本稿で明らかになった知見を、二つの境界線に分けて説明していきたい。一つは、社会階層の境界線である。グローバル・シティとしての上海では、都心部に住む富裕層の親は、別の集団の親とは異なり、グローバルな視野を持ちながら子どもに多様な学校外教育の機会を与えていることが明らかになった。それに対し、近郊部に住む貧困層の親は、高額な学校外教育に大きな無力感を持っており、進学より就職して生計を立てていくことを重視している。この境界線は、中国の都市内の二極化の社会階層再生産の構図を描き写している。

二つ目は、居住地の境界線である。上海の都心部は、「雑居」という形で多種多様な学校外教育の資源が、富裕層の親らに影響を与えるだけでなく、貧困層の親らにも影響を与えていた。一方で、上海の近郊部や郊外は「ブロック」という形で、富裕層と貧困層との居住空間が大きく分かれている。その結果、近郊部の富裕層の親らは、常に都心やオンライン学校外教育資源を利用する一方、貧困層の親らは、社会階層の限界のみならず、居住地の制限を越えることも一層難しくなっている。そのため、貧困層の親らは、子どもの教育を放棄する傾向がある。この境界線は、中国の都市内部の居住地による教育不平等の再生産の構図を描き写している。

「学歴社会」の価値観の文脈を下支えにして、各集団の親らは、現有の諸資源を利用して階層維持や階層上昇の目的を達成したいという目標がある。特に、都心と近郊との分割という背景の中、富裕層の親は経済資本や文化資本を利用して、この境界線を越えることが容易であるが、近郊の貧困層の親らは、社会階層や居住地の二つの境界線を越えることに困難が伴う。結果として、近郊の貧困層は、社会全体から排除されやすいという上海市の不平等再生産の全体像が見えてくる。

本論では、従来中国の都市と農村との二元社会における教育格差に着目する分析ではなく、大都市の内部の社会不平等の構造を切り口とし、異なる社会階層と居住地に分けた親たちの学校外教育の選択について分析してきた。以上の分析を通して、グローバル・シティである上海市では、都市化の発展と共に、親の学校外教育への選択は、居住地という要因に強く規定されていることが明らかになった。今後は、調査対象の範囲を拡大して、量的調査法を併用することによって、量的・質的調査の両方法から、親らの学校外教育の選択動機を明らかにしていきたい。また、親が学校外教育という教育戦略の一つルートを通じて、今後子どもにどのような教育達成を目指しているのか、という構造を全体的に捉える分析を深めていく必要がある。さらに、社会階層分極化による居住分化からもたらす教育不平等の再生産の悪循環を避けるために、政府はどのような改革が必要なのか、などを解明することが非常に重要であろう。

参考文献

- Bourdieu, Pierre, *La Distinction, Critique Sociale du Judgement*, Minuit, Paris (=1990『ディスタンクシオン—社会的判断力批判—I, II』石井洋二郎訳, 藤原書店。) 1979
- 馬芳芳「中国中小都市における学校外教育から見た親の教育戦略に関する階層差: 浙江省慈溪市を事例に」『家族社会学研究』29(1), pp. 19-33, 2017
- Cardona, B., & Jain, S., & Canfield-davis, K. *Home-School Relationships: A Qualitative Study with Diverse Families*, Qualitative Report 17, 70, 2012
- 張建『中国の教育格差と社会階層』東京電機大学出版社, 2021
- Li, Zhigang & Wu, Fulong 「Socio-spatial Differentiation and Residential Inequalities in Shanghai:

- A Case Study of Three Neighbourhoods」Housing Studies.21,5,pp.695-717,2006
- 金子真理子「学力の規定要因—家庭背景と個人の努力は、どう影響するか□」荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学—調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店,2004
- 古田和久「高校生の学校適応と社会文化的背景：学校の階層多様性に着目して」『教育社会学研究』90, pp. 123-144, 2012
- 小針誠「小・中学生の学業成績と学校外学習時間に関する一考察：社会階層を媒介として」『子ども社会研究』8:pp. 79-91, 2022
- Lareau, Annette, Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life, University of California Press,2003
- Lareau,Annette, Unequal Childhoods: Class, Race, and Family Life, Second Edition,with an update a Decade Later, University of California Press,2011
- Lareau,Annette,Home Advantage: Social Class and Parental Intervention in Elementary Education, Education Policy Perspectives,Falmer Press,1989
- 劉堃・郭菲「城郷内部階層分化与高等教育機会獲得」『教育発展研究』23: pp22-29, 2020
- 前馬優策,「日本における「言語コード」論の実証的検討：小学校入学時に言語的格差は存在するか」『教育社会学研究』88, pp. 229-250, 2011
- 松岡亮二「学校外教育活動参加における世帯収入の役割：縦断的経済資本研究」『教育社会学研究』98, pp. 155-175, 2016
- Sassen, Saskia, The Global City: New York, London, Tokyo, Princeton University Press,1991(=伊豫谷登士翁・大井由紀・高橋華生子訳『グローバル・シテ□ニューヨーク・ロンドン・東京から世界を読む』筑摩書房,2008)
- 都村聞人「家計の学校外教育費に影響を及ぼす要因の変化：SSM1985・SSM2005 データによる分析」『日本教育社会学大会発表要旨収録』pp. 131-132, 2007
- 徐勤劍『不同階層子女課外補習活動研究』,上海師範大学学位論文, 2012
- 余常清「小学生をもつ親の教育戦略の階層差に関する研究のための基礎的分析—上海市の都市的性格の視点から—」『教育学雑誌』58, pp. 29-39, 2022
- 張明・張学敏・涂先進「高等教育能打破社会階層固化吗?：基于有序 probit 半参数估计及夏普里分解的实证分析」『財經研究』42, 08, pp. 15-26, 2016